

夏の栞

— 中野重治をおくる —

佐多稲子

新潮社版



夏の 栞しおり——中野重治をおくる——

一九八三年三月五日 発行
一九八三年四月三〇日 四刷

定価 一三〇〇円

著者 佐多さた稲子いねこ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

業務部 (03) 三六二

電話 編集部 (03) 三六二

振替 東京 四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替
えいたします。

印刷 東洋印刷株式会社 製本 大口製本株式会社
© Ineko Sata, Printed in Japan 1983

ISBN4-10-328702-0 C0093

夏の栞

——中野重治をおくる——

あの夏は暑さがはげしかった、と何故かいつもそうおもってしまふのは、その夏の間、しょっちゅう馳け出すような気持だったのを、自分で先ずそのように集約してのことらしい。私が東京にいながらわが家を離れているというのも、いつにないことだった。家の中の少々のもよう変えをおもい立って、はじめのうちは、壁を落とす埃をかぶったり、釘を打つ音をそばに聞いて暮しながら、三時のお茶の時間には年配の親方の、当時「中支」といった方面でたまたま命拾ひした兵隊のときのおもい出から、戦争はするもんじゃない、と現在の意見になる話に合づちを打ったり、もうひとりの背の高い好青年の無口な働きぶりに感じ入ったりして過ごしていたが、茶の間につづく部屋にかかるときになって、私と母がそこにいるのは仕事の邪魔になったのだ。七月のはじめ、私と母は、隣りに住んでいる息子夫婦にあとを頼んで、東中野の長

女の家に暫時同居の形で移った。東中野は大久保駅近い私の住いから歩いてゆける都合のよさであり、長女は夫を喪ったあと、次男の大学生との二人暮らしでもある。私はその長女の家で洋間つくりになった二階の部屋に座ぶとんで坐って仕事をしたり、何かの用事で始終出かけたりにもしていた。私が、息子から電話で話を聞くのは、そんな事情なのである。もつとも、中野さんが黄疽で明日入院というのは、私の留守中にかかってきた中野夫人の原泉さんからの電話で長女の葉子がそれを聞いていた。中野重治はおとといの七月十一日に、白内障の手術をした駒込病院から退院した筈である。それが明日と云えば、引きつづいての再入院、ということになる。そうおもうと、葉子の伝言がことごとしく聞えた。だからそのはじめの夜のことは私は詳しく覚えてゐるのだ。原さんの電話は、中野の明日の入院に私の息子の健造を手伝いに頼むものでもあったと聞くと、私はすぐ彼に電話をし、その話中のブザーを耳にすると、中野さん宅へダイヤルを廻した。原さんの押えた声に、最初から原さんの緊張を感じ、私のもの云いも重くなった。中野は今眠っているからと前おきをされた原さんは、中野の顔色の異常に黄色いのに自分が先ず気づいたことから話出した。昨日、つまり退院の翌日、手術あとの手当てに行つた駒込病院の眼科で、その手当てを受けている際、中野のその顔色に気づいたのだと云う。それを云うとき原さんは、自分と医師の交した話を、双方の会話どおりの言葉も入れて、こまかくなつた。原さんの訊ねた不安は、医師にもすぐわかつたらしい。明日にも早速診察を、と

というのが医師の指示であった。そして次の日の今日、兼ねて定期的に診察を受けている新宿駅西口のある医院へ中野を連れて行ったのだという。中野重治がその医院へ定期的に行くようになったのは、三年ほど前に心臓の周囲に水の溜まったことがあってそれ以来なのである。原さんはその医院でのことを、明日入院、ということになった結論だけに合わせて話し、そのあと、自分ひとりではどうにもしようがないもの、というとき、その言葉の声の調子を少し変えた。健造との連絡はすでについたらしい。テレビ映画の監督という仕事の彼は、この間までの連絡ものが丁度終ったときで、都合よく手が空いていた。

この電話のあと、健造の方から私へ連絡してきた。

「肝臓が固くなっている、ということらしいね。入院、長引きそうだよ。明朝、十時までに女子医大へ入ることになっているけど、僕、いっしょに行きます」

そんな彼の話で、中野の今度の症状がかねての心臓ではなくて、肝臓に発見されたこと、入院が長引きそうということがはじめてわかる。私は吐息とともに彼に云っていた。

「あなたが暇のときでよかった。私は行けないもの」

「暇でよかったよ。まったく。大丈夫です。僕、行きますから。終わったら連絡します」

彼も改まったように切口上になっている。

翌日は雨であった。久しぶりの雨で、温度も下がり、この頃からの暑さが救われるようであ

った。私はリノリウムの床に坐って仕事をしていた。中野の入院をすませたという息子からの知らせは夕方になってからである。彼はその電話をまだ病院にいてそこからかけていた。

「いやア、入院手続きというのはいろいろあるもんだね。原さんひとりじゃとても無理だった」
「中野さんは？」

「今日はどうということなしで、明日からでも先ず検査が始まるんだろう。じゃ、僕は今日は帰りますから。原さんは病院に残られるようです」

その電話のあと私は、自然に出た動作で手を合せ、口の中でつぶやいた。どうぞもう一度、無事退院できますように。そして私は、おのずと出たわが言葉のその意味を、心のうちで尚も追った。

中野重治がこの一年ほど前から、急速に身体の弱りを見せているのは、端た目にも感じ取られていた。先きに云うように心臓の不調を抱え、黒眼鏡をかけた視力は足許もあぶなかったし、難聴もつづいていた。一九七六年九月に第一巻の出た「中野重治全集」刊行の仕事がその中ですすめられていて、全二十八巻のその全集は、一九七九年のその夏、二十七巻が出て、あと一冊を残すだけであった。私などは、中野の身体の衰えに、全集に寄せた中野の労力を計るようにおもったりした。また、二年ほど前から中野は口髭を立てているが、それは似合わなくはなかったけれど、老境の風貌を際立てるようにも見えもした。二年前の三月、信濃町の千日谷会

堂で行われた竹内好の告別式で中野のその口髭をはじめて見た国分一太郎は、私をつかまえて、中野さんは何故、口髭を立てたんですか、と迫るように云ったものである。

「わたし、知らないわ。私に言われたって。私だって、中野さんに聞いてみたことはありませんもの」

私も、半ば冗談のその詰問に笑って答えたが、私は実際、中野に、その口髭を立てた心境を訊ねたことはなかった。中野の方からもそれについて何か云おうとしたこともない。お互いの間には、こういうことがしばしばあったようにおもう。それは何だったのかと考えるが、私の場合は多分に気質でもあるのだろう。中野の口髭については、原さんが一度何かのときに、ひとり言のようにして云ったことがある。

「中野さんは」

と、これもわざと、さんづけで云って、

「中野さんは、あの髭が、気に入っていらっしやる」

それに対しても私は何も言葉を合わせなかったが、中野が自分の口髭を気に入っている、と、いうのをそのままに受け取る、という感じ方をした。しかしそれで、中野の、口髭を立てた動機がわかったのではないけれど、微かに、愛らしい気がしたのを覚えている。ただ、中野の場合、体力の衰えが目立ってきたから、白い口髭は、何か老いの心境を感じさせたのである。

中野の入院のそのときから一ヶ月ほど前、中島健蔵が亡くなって、密葬が自宅で行われるという日であった。かかってきた電話に、中野のくぐもった声が聞えた。中島健蔵の葬儀に行きたいが、家がわからぬ。それで先ず、君の家へ行くから、いっしょに行ってくれ、というものであった。

「君のうちなら、わかるだろうとおもう。原がいればいいのだが、彼女、いないのでね」

原さんはその六月いっぱい、三越劇場に出演していて、先頃私もその舞台を見た。殆ど出づつ張りの主役とも云える老婆の役で、その老婆によって舞台を盛り上げているほどの好演をしていた。原さんは今日、中野の外出に何かの手配をする間もなく出かけたのであろう。

世田ヶ谷の中野の家から、方向で云えば中島健蔵宅の中野区と私のいる大久保は同じと云えなくもないが、道順としては大久保へ寄るのは遠回りである。中野重治の、中島健蔵をおくりたいという想いの中で行先がつかめず、とつおいつしているのが見えるようにおもえて、私もあわてた。不確かな足許もあぶない。中野の、君の家へ寄る、というのに、それはいいけれど、と口ごもりながら、遠回りになることなど云ううち、その日も丁度、健造がうちにいるのをおもいついた。

「中野さんはお宅で待っていて下さい。健造がむかえに行きます。私は中島さんの方へ先きに行っていますから。そして帰りは、私がお宅までおくってゆくわ」

そういうとき私は、悲哀のようなものを感じていた。中島健蔵の家を、中野がまったく知らない筈はなかった。しかしひとりでは行き兼ねている。

どうぞ、もう一度無事退院を、という言葉の浮ぶのは、こういうことにつづく怖れだったとおもう。一九七九年七月十四日、中野の入院がすんだことを聞いてこの言葉をつぶやき、そして、そうつぶやいたことを、消えてゆく余韻としてまたおもい返すのは、わずかな数日後であった。

怖れがあつたにしろ、それが胸のうちのものであつたときと、目の前に判然とその怖れが本当のものになったときの相違は、まるでそれまでの不安など泡のように感じさせるものだった。私はそれまでの自分の怖れに、不誠実をさえ感じた。

中野重治の、胆嚢の癌が、肝臓に転移して手術不可能、予想として一ヶ月の命であり、保つて三ヶ月、と聞くと、私は、子供のように、厭々、と泣き声につぶやき、感覚の上でその事実を押しもどすようにした。何かの大きな手に掴まれるようであった。

二十一日の昼すぎ、女子医大新館の三階のロビーに、原さんと、中野夫妻のひとり子の鰻目卯女さんを中心にして寄り合うように集まっているのは、中野の入院をはじめから知っている

四、五人であった。みんな、原さんからのその朝の呼出しで馳けつけていた。

「あと、ひと月、よくて、みつきなんですって」

原さんが、押えつける調子でそう結んだとき、彼女に並んでいた私は、原さんの肩に手をまわして強く抱いた。彼女も自分の膝の上で、私の片方の手先きを握りしめ、

「中野が、可哀想だわ」

と、声をつまらせた。

誰もすぐにはものを云わなかった。そのあと、みんなへの説明のためにロビーへ出てきてくれた担当医師による診断結果も、当然として原さんの言葉と大差はなく、しかしその証明は、非情であったとしても重かった。その重い確認のあとで、みんなはそれぞれに、中野本人を心においていたようだった。癌を、当の病人に知らせるべきか、否か、ということは一般に論議されていることでもある。その癌が胆嚢や肝臓のものであれば、命に関わるとしなければならぬ。その事実を、中野本人に明かすかどうか、ということは、そばにいるものに責任として迫ってきた。小田切秀雄がそれをはじめにみんなの前においた。

「僕は、中野には知らせるべき、というのが、本来なら正しいかとおもうけれども、どうでしょう。ただ、中野の心臓がね、今、弱っているから。それとの関連で考えねばならないということがあるてね」

小田切さんは、開業医の夫人が、ときどきは中野を診察した人なので、その夫人の意見もつけ加えた。中野の心臓の状態を案じる、というのは、その小田切夫人の意見でもある。小田切秀雄がそれをつけ加えながら、しかし先ずはじめに、本来なら、と云うのは、当の中野重治の、これまでの生涯の態度に対しての考えである。私にもそれがわかる。中野さんは自分の病名をはっきり知っておきたいだろう、それが中野さんだろう、と心のうちでつぶやく。しかしそれがはっきり言葉にならないのは、入院後の病人の目立つ衰弱をおもうからである。四高時代からの友人で、その後の政治活動でも中野と近い石堂清倫もその場にいるひとりだが、石堂さんにも結論は出せない。「中野全集」の編集者である松下裕が、中野がこの問題について書いている、と編集者の詳しさを云う。しかしおたがいはその場で決め得なかった。自分たちだけで決められることもおもわなかった。原さんはもうその場をはずしている。連日の疲労を緊張で持ち堪えている原さんは、ものに触れれば火花を散らす神経になっている。彼女はもう、そこにじっとしていられたかったのだ。

その日みんなは、今日から一層病人のそばを離れられなくなる原さんを考えて、原さんを手伝う人や、留守宅への手配など決めたが、病室へは入らずに帰った。その日私は、もはや、中野を考えると自分のその対し方の質が変っていることをおもった。明日からは、中野の言葉のひとつひとつを忘れまい、とおもうのも、それはもう最後になるから、という諦念によつ

ている。それは今までとはっきり違う質であった。おたがいの五十年を越す交わりに感慨を抱く余裕はまだ無いまま、さきほど原さんの、中野が可哀想、と云った言葉に似た感情になる。そわそわと追われるような感覚の中でその違いをおもったとき、昨日、病室で聞いた中野の言葉を、私はまだ、日頃の中野らしさに比重をおいて受取っていたと気づいた。あるいは私はまだ逃げていた。しかし昨日にしろ私は、一度は仕事にかかりながら、衝動的に立ち上って病院へ走ったのであった。仕事で坐った心に、かたわらから浮んでくる予想がやがて寂寥感でひろがり、私はその自分の寂寥を病室へ及ぼして、とにかくそこへ馳けつけたかったのである。病室ではまるで思いが符合したかのように、原さんがたまたま買物に出かけて、中野ひとり、手術後の眼のために明りをさえぎったベッドで点滴を受けていた。中野は、入ってきたのが私と気づくと、しゃがれた弱い声で話し出した。

「今日は、朝昼食事抜きで検査をしてね。ちょっと失神したんだ。それで点滴をするんだろうが、原がいなくてきに点滴にくるものだから、心細かったんだ」

来てよかった、と胸の中でつぶやきながら、私はベッドのそばに椅子を近寄せた。ベッドの上の中野は、もうまざまざと病人のやつれを見せている。おととい来たときは、駒込病院での手術の眼帯がとれて、両眼でなら私の顔もおぼろには見える、と云い、便所へも立って行った。入院後六日目の今日まで、検査が続いているのだろう。ひとりで心細かった、などと、あから

さまざまな弱気で私に云うのは、よくよくのことだ。検査は疲れるから、と私は合づちを打ったりして、点滴の管を見上げなどした。そんなとき中野が話し出した。

「医者の間には、癌をうたがう、という言葉があるが、ふつうなら、癌ではなからうかとおもう、というところを、癌をうたがう、と云うのは、ドイツ語の直訳からきているのだろうね」

中野はそう云うと、そのあとドイツ語らしいのをゆっくりと口にのぼせた。多分それが癌をうたがう、というドイツ語なのであろう。私は、ええ、ええ、とただうなずいた。私は、今日自分のここへ駆けつけるようにしてきたのが、その予想におののいてであったのに、中野が話の中で癌という言葉を出したことに狼狽しなかった。それは殆ど無意識のうちの強力な押えであつたろうか。私は、中野の意見を聞くときのあるふだんの気持を保った。しかしその意識の底で、この話を早く打ち切りたい、という思いのあるのも感じていて、それで、ただ、ええ、ええ、とうなずくだけになるらしかつた。が、中野はその話を尚も続けたのである。

「たとえば、教授が患者の検査を若い医師たちにさせるだろう。そんなとき、若い医師たちは、腹膜炎をうたがう、腎臓炎をうたがう、と云ったが、今でもそう云っているのかね」

「さあ、どうなのだろう。私にはわからないわ」

「ああいうことは、日本の近代文化の成り立ちとして、仕方のなかったものもあるにはあるだろうが、その後、誰かが問題にした、ということはあるだろうか」

「そうねえ」

と云いながら私は、一層、いつもの中野の話を聞いている感じになっていて、中野らしい言い分だと受け取りながら、ただ話の中で、はじめが、癌をうたがう、という言葉で云い出され、あとに続いたとき、腹膜炎と腎臓炎に変わったのを心にとめていた。腹膜炎をうたがう、腎臓炎をうたがう、というのが、殊更めいていた。癌に変えてそんな病名を云うのが、何かの彼の心理的な操作を感じさせた。その操作は、聞き手の私に対してなのか、自分自身に向けてなのか、そのどちらでもあるようにおもえる。そうおもったとき私は、点滴の針を刺して臥ている中野を、何かから庇いたい、という思いにかられた。しかしそれはどう現わしようもないことだった。

まもなく戻ってきた原さんは、中野の点滴に、すぐ見咎める調子になった。

「あら、点滴するなんて、云ってなかったわよ」

中野がそれに答えた。

「お前さんが出てから、すぐきたんだ」

「私にそう云ってくれりゃ、出かけたりしなかったのに」

そんな原さんの反応は病院へ向けられている。原さんはそのあとロビーで私と二人になったとき、私の伝えた先ほどの中野の話に対しても神経を立てた。

「中野はドイツ語がわかりますから、とあれほど云っておいたのに……ああいうことを云うで